

## プラハの子らの夏休み

大槌 優子

クリスマス休暇があげ、仕事や学校を中心とした平常の生活にもどると、まもなく、知人達からこんな質問をされる。

「この夏の休暇は、どちらへ？」

「もう休暇の予約は終えましたか？」

笑顔でうなずきながら、具体的な期間や目的地を挙げたいところだが、たいていは、この瞬間になって、半年先の予定に思いを巡らせることになる。それでは、もう遅い。旅行社や職場が仲介役となる夏休み計画は、十一月に予約を受け付ける。そのこと

がわかっているとしても、家庭の団らんはその話題を持ち出しにくい。家族は、皆それぞれのことには忙しくしているし、それでなくとも、家族全員が夜になって出会う生活では、その時しなければならぬと思えることが多々あるものである。それらを優先させて日を延ばしているうちにクリスマス準備に入り、あわただしく新年があけるといふわけである。

知人宅で「さて」と考え始めて、ようやく我が家に夏休暇の話題が登場する。中心になるのは、家族そろって過ごす二週間か三週間の計画である。この

国の勤労者には、二十日間、つまり四週間の年休が認められていて、最低三週間以前に届け出なければならぬとされている。だから、急病の場合に年休を利用することはできない。本人の病気休暇、あるいは子どもの看病休暇を願い出ることになる。年休は、健康な状態で、心身をリクリエイトさせる目的で利用されるものである。多くの人々は、夏と冬にかけて休暇をとる。学齢期の子どももつ家族は、七月と八月に夏休暇をとることが優先され、それ以外は、五月・六月、九月・十月にとっているようである。およそ三月の半ば頃までに職場に年休届けを出し、勤務者間の調整をとる。届け出を怠っていると、係から呼び出されるそうである。こうして、外部者から見ると、職場の機能がストップするのではないかと思われるような夏休暇期間が準備されていく。休暇をとる側も、数か月かけてプログラムにあった準備を進めていく。それをまた楽しんでいく。休暇の過ごし方がゆったりと充実するはずで

ある。

太陽の沈むのが九時頃になる六月中旬、子ども達は、勉強中心の生活に疲れ、それにつきあう大人達も解放感を味わいたいと秘かに思い始めるようになると、人々の話題は、夏休暇のことで花開く。団地内のバス停で、子ども達と同級生の父母に出会うと始まる。

「夏休みが楽しみですね。」

「お子さん達の夏休み計画は？」

会話の波に乗って、にこやかに答える。

「七月はじめの二週間は、体験入学という形で、日本人学校に通います。八月はじめの二週間は、家族で山に行きます。」

そこで再び、こちらの人々の「子どもの夏休みの生活」の概念からはずれていることに思い知らされる。

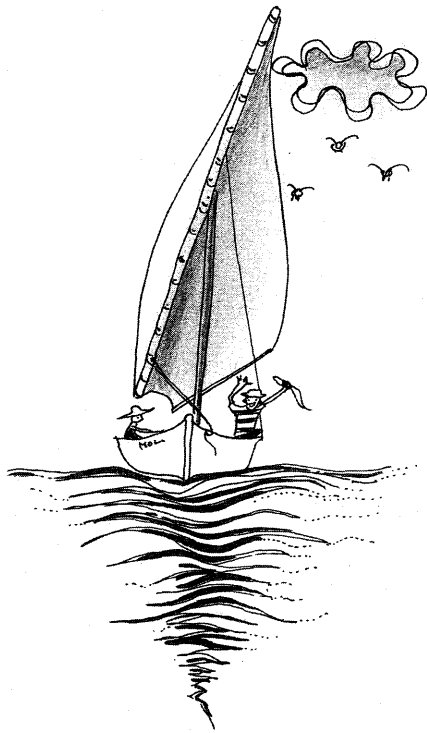
「夏休みに学校へ？ 夏休みにも勉強させるのですか？ せっかくの夏休みなのに……。」

「家族旅行の前は？ 後は？。」



らない事情に寛容であるらしかった。職場の側の不都合と同じ次元に並べて対立させない、勤務者の配慮を感じた。子を連れて勤務する人が一番大変な思いをしているというところが、誰の胸にもあるのだろう。子ども達は、診察室の隣の部屋にいわば閉じこめられて過ごしたわけだが、夏休みの思い出をテーマにする作文で、この体験をとりあげた年もあった。

学校、家庭、山、親の職場で各二週間ずつをすこ



す子ども達の夏休み計画を聞いて、気の毒そうな顔をして終わる人ばかりではない。田舎家へ来て合流するよう勧める友人達もいる。両親は、週末に子ども達のところに通えばよいというのである。都会の空気よりも、家族の絆を重視して、結局は合流計画を実現させないまま今日に至り、子ども達もそろそろ独自の夏休み計画を必要とする年齢になってきた。

家庭の子、自然の子として、二か月の夏休み生活を充実させたいと思っても、両親だけでは担いきれ

ない。祖父母、友人などの助力者を必要とする。その助力者を社会に求める場合もある。職場や地域の青少年の家が組織する合宿、キャンプである。山や湖など豊かな自然に抱かれての集団生活を基盤にして、いろいろな活動をしている。各分野のフィールドワーク、外国語研修、各種スポーツの技能訓練など、様々な領域にわたっている。専門の指導者を中心に、大学生あるいは高校生が補助指導者として参加している。これらの経験が、教育実習、その他の実習単位の一部として認められるということである。「未来の専門家」としての資格を活かしているものももちろん。開催規模が、国際的なものから地域的なものまで、実に多種多様で数も多い。家族で過ごす休暇以外の夏休みは、いくつかのキャンプに参加して過ごすという子ども達もいる。同じキャンプに二期間続けて参加する子ども、毎年参加して遂にはその補助指導者になるというケースもある。

我が家の子ども達が参加することから、偶然私達

両親も指導チームの一員として協力参加したキャンプのことを紹介しよう。

名前をつけるとすれば、「カヌー教室」である。

プラハ市中心を流れるウルタヴァ（モルダウ）川の上流、チェコの南の国境近くの川岸が開催地となる。カヌーの技術を習得しながら、ウルタヴァ川を下ってキャンプ地を移動させ、二週間のテント生活を続ける。対象は、水泳のできる十歳から十四歳までの子ども達である。

四十人の子ども達に、十四人の指導者チームがつく。そのうち七名は、子ども達のグループを担当する。一人の指導者が、五、六人の子ども達をうけ持つことになる。他の場合でも、一般にグループが十名を超える時には、必ず助手がつく複数指導制になっている、無理のない指導体制をとっているのは興味深い。

川沿いの野原に、二十余りのテントが並ぶ光景

は、さながらインディアン<sup>①</sup>の集落を思わせる。その生活も、外部から食料を調達する以外は、原始のそれに近い。森へ枯れ木を集めに行つて、薪をつくり、火をおこし、調理する。丸太にすわつて食事をし、川で皿を洗う。カヌーの講習をうけながら、キャンプ場の近くで練習をする。カヌー遠足を上流でする時には、運搬車が活躍するが、十キロメートル以内の地点までは、人は徒歩である。子ども達はよく歩く。遠足といへば、二十キロメートル位を歩くのは普通になつてゐる。カヌーでの川下りが終われば、その補修も自分達でする。明るい間にテント内の身辺整理をし、寝袋を整えて夜に備えなければならぬ。電気も水道もない生活に、必要な知恵が、自ずと働くようになる。

こうした活動を主軸にして、さまざまなプログラムが展開する。スポーツを楽しみ、森を探検し、古城を見学し、修道院のコンサートにでかける。文化的なプログラムの時、スポーティではあつても、そ

れに合った服装をした子どもたちがテントから出てくるのをみて、私は正直言つて感心した。一輛の汽車に乗つて、近くの村の室内プールにも行つたが、それは水泳よりもむしろ温水シャワーを意図しているようだった。最後のキャンプ移動は一日がかりの行程で、ゆったりとした流れを下つて行つた。

町の生活では、楽しみの部分だけを安易に手に入れていることに気づかされ、「くらし」を創つていくことの大変さやおもしろさを体得していく、二週間の経験<sup>②</sup>だつたようである。

大人の私自身は、常に「生活の本質は何か。」と自分に問いかけて行動決定する日々の連続で、キャンプ生活をくつろいで楽しむまでに至らなかつたことを告白しなければならぬ。

幼稚園時代から、二週間の林間合宿をこなして成長していく子ども達のたくましさは、そのまま「自然の子」のそれにつながるのだろう。

(ブラハ在住)